

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニュースレター

2001年度の春季大会は6月9日、青木先生のお世話で久々に成城大学において開催された。ディケンズの命日にふさわしく、知的興奮を駆り立てるプログラムが組まれ、名誉支部長の宮崎先生をはじめ98名が参加し大盛会となった。この日、小池先生より“Pickwick Tea”の寄贈があり、参加者は馥郁たる紅茶の味と香りを楽しみつつ、物心両面の満身にひたった。以下、大会の報告および諸報告をお知らせいたします。

春季大会

ディケンズ命日に当たるこの日、西條支部長より Dean Stanley の追悼演説 (1870) と、そこに述べられたディケンズ文学の“parable”の重要さが紹介された。“parable”としてのディケンズ文学は、今世紀においても輝きを失うことはなく、ディケンズ批評はやがてディコンストラクションの時代を経てもう一度、総合を求める姿勢に立ち帰るであろうとの期待が述べられた。つづいてシンポジウム・講演に移った。

1 シンポジウム「ディケンズとホガース」(14:30-16:50)

青木健氏(成城大学)の司会のもと、次の3名の提言を受けて質疑応答が行われた。

(1) 蛭川久康氏(武蔵大学)は「画家ホガースのまなざし」と題し、ホガース絵画は「楽しませると同時に人心を向上させる」という18世紀美学に基づいて制作されていること、また彼は“my picture is my stage, my men & women my players”(cf. *As You Like It*, II, ii, 139-40)を基本として風俗画を描きつつも根底には社会悪の原因を見据える目があることを指摘し、具体的に“Captain Coram”(1740)と“Gin Lane”(1751)を取り上げ、社会改良家としての画家の目がどこに注がれているかを語った。

(2) 中村 隆氏(山形大学)は「貧困という見世物」と題して、ホガースの「タイバーン・フェア」の解説から解きはじめ、これと『オリヴァー・トゥイスト』における殺人・処刑場面を比較考証し、19世紀社会の犯罪実景とこれを楽しむ観客とを浮き彫りにした。ブロードシーツの購入、およびディケンズの“Sikes and Nancy”の公開朗読は圧倒的に女性に支えられた(異論もあるうが)との、興味深い指摘がなされた。

(3) 松本靖彦氏(東京理科大学)は「ディケンズとホガースの造型術」という題で、ディケンズの速記術とホガースの「美の分析」、とりわけ線による場面・人物速記を比較し、画家と作家の共通点をみごとに浮かび上がらせた。

3氏の提言はともに質の高い内容で、会場からは質問も出され、好評を博した。最後に司会の青木氏より、Dr. Paul Schlicke(アバディーン大学)作成の、ディケンズとホガースの関係を記した資料が配布されて幕を閉じた。

2 講演(17:00~18:00)

太田良子氏(東洋英和女学院大学)司会による、荒井良雄氏(駒澤大学)の「ディケンズ文学の語り 文体と朗読表現係」は、ディケンズ文学の本質に触れるすぐれた講演であった。荒井氏はディケンズを“the greatest dramatic writer”と捉えて、彼の作品の演劇性、文体の音楽性に着目し、作品朗読の実演を交えながら、ディケンズのスピーチ・リズムを解説された。シェイクスピアおよびポーの作品朗読、『クリスマス・キャロル』(小池訳)の日本語朗読を交えつつ、ディケンズ文学の音とリズムの分析に踏み込んだのは、とても刺激的であった。

3 懇親会(於成城大学ラウンジ)(18:10~20:30)

60名を超える会員が参加し、宮崎先生の乾杯の音頭を受け、なごやかで楽しい語らいの場が盛り上げられた。

諸報告

- (1) 理事会の決定により、『年報』への論文投稿は一部変更され、次のようになりました。
論文原稿(フロッピー・ディスクおよび清書原稿)は原稿用紙 35 枚以内、締切は 7 月 10 日(必着)
投稿先は日本支部事務局宛。理事の審査(採・否・再提出)をへて受理・掲載する。
- (2) 記事・ニュースの締切は 7 月 31 日とする。
- (3) 2001 年度総会は 10 月 6 日、同志社大学において行います。シンポジウム「ディケンズ批評 古典時代」(仮称)においてチェスタトン、ギッシング、オーウェルを取り上げる予定です。また講演は Graham Law 先生(早稲田大学)による 19 世紀分冊出版事情です。ご期待下さい。なお、研究発表は時間の制約上、見送らせていただきます。
- (4) 日本におけるディケンズ研究書誌を作成するため、会員(および会員以外の方)2000 年度の著書・論文等を集めています。ご協力をお願いいたします。送り先は下記の通りです。
松岡光治理事宛 (e-mail: matsuoka@cc.nagoya-u.ac.jp)
- (5) 田辺洋子氏による『ニコラス・ニクルビー』(こびあん書房、2001 年)でもって、ディケンズ長編小説の翻訳はすべて完了しました。また、日本支部ウェブサイト上の作品梗概もすべて完了しています。
- (6) 福村絹代氏が 4 月 6 日に、Kathleen Tillotson 氏が 6 月 3 日に亡くなりました。ご冥福を祈ります。

以上